慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「理性的」な迫害： クリュニー修道院長ペトルス・ヴェネラビリスとユダヤ人
Sub Title	Rational but prejudiced : abbot Peter the venerable of cluny against the Jews
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.37- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「理性的」な迫害
――クリュニー修道院長ペトルス・ヴェネラビリスとユダヤ人――

神　崎　忠　昭

ユダヤ人はその歴史を通じてさまざまな迫害に直面してきたが，西欧においては 11 世紀に彼らに対する態度が大きく転換した。西ゴート王国における迫害の波が静まったのち，西欧では，それまで散発的な事例はあったものの，大規模な迫害は絶えていた。むしろフランク王国やオットー朝神聖ローマ帝国などでは経済振興策などにより親ユダヤ的政策がとられていたとさえ言われる。だが 1095 年末十字軍の熱狂が高まるなかでヴォルムスやマインツなどで改宗か死を強いる迫害が生じ，数千人ものユダヤ人が「キリストを処刑した不信仰の輩」に報復しようとする十字軍士に殺戮されたのである[1)]。もちろん現在でもユダヤ人がヨーロッパにおいて暮らしていることに表れているように，ユダヤ人とキリスト教徒はつねに敵意をもって相対していたわけではなく，平時においては共存していたが[2)]，この時期は後世の反ユダヤ主義の高まりに大きな影響を与えることになる。

本稿は，12 世紀という西欧の新生の時代において反ユダヤ的な論争書

1）小崎閏一「第一次十字軍時代のユダヤ人迫害」『鹿児島女子大学研究紀要』9（1988 年）1–14 頁および中島健二「第 1 回十字軍とユダヤ人迫害：日常性と事件性との連関」『金沢大学経済論集』37（2000 年）83–117 頁参照。

2）Cf. Jonathan Elukin, *Living Together, Living Apart: Rethinking Jewish-Christian Relations in the Middle Ages*, Princeton University Press, 2013.

や書簡を著し，西欧において「増大しつつあったユダヤ人憎悪に対し，より広い基盤作りをした」[3] とさえ一部の人々に評されるクリュニー修道院長ペトルス・ヴェネラビリス（1092 頃 –1156，以下ペトルスと略す）を取り上げて，彼のユダヤ人観を，先行研究に沿いながら [4]，簡単に紹介することを目的とする [5]。

1. 穏和なペトルス：「異端者」アベラルドゥスに対して

12 世紀は西欧が長い停滞から目覚め，それまでのようにただ聖書などの権威によるのではなく理性に基づく探求が企てられ始めた時代である。イスラーム世界などの外部との接触は知の拡大をもたらし，さまざまな分野で革新をもたらした。さらにカンタベリーのアンセルムス（1033–1109）の『神はなぜ人間になられたか』に見られるように，イエスの人性について思索が重ねられ，人間性そのものを肯定的に問うようになった。英雄が讃えられ，恋愛が謳われた。意思が問われ，心に陰翳がつき，豊かな感情が吐露され，内面が重視されるようになったのである。明るい希望に満ちた時代と呼べるかもしれない。

この 12 世紀ルネサンスの代表的な人物の一人がペトルス・アベラルドゥス（1079–1142）である。彼は今日ではスコラ学の礎を据えた人物とされ，ボエティウスのアリストテレス翻訳に基づく「旧派」の論理学者では

3）ユーリウス・H・シェプス編『ユダヤ小百科』（水声社，2012 年）918–919 頁。

4）特に，Jean-Pierre Torrell, “Les Juifs dans l’œuvre de Pierre le Vénérable”, *Cahiers de Civilisation Médiévale*, 30 (1987), pp. 331–346 に大きく負っている。

5）なお本稿は拙稿「偏見と寛容――クリュニー修道院長ペトルス・ヴェネラビリスとイスラーム」，浅見雅一・野々瀬浩司編著『宗教と寛容――中近世の日本とヨーロッパ』（慶應義塾大学出版会，2019 年）217–234 頁と内容的につながっており，一部重複する。

あるものの，三段論法などの斬新な方法を用いていた[6]。だが一方で彼は多くの師に学び吸収し終えると，いずれの師とも対立して論破し忘恩の徒と見なされ，それに加えて教え子のエロイーズと子をなして 1117 年頃去勢されるなど，当時大きな顰蹙を買っていた。1120 年頃に彼は『三位一体論』を著したが，神の領域に論理学の方法を適用するという批判に加え，他の問題も加わり，伝統的な神学を奉じるクレルヴォーのベルナルドゥス（1090–1153）をはじめとする者たちに繰り返し異端者視され，1140 年のサンス教会会議で断罪された。

このときベルナルドゥスは教皇インノケンティウス 2 世（在位 1130–1143）に宛てて書簡（190）を送り，「聖なる使徒の後継者であるあなたに訴えざるを得ないことが生じました。神の国は危機に瀕し，特に信仰に関わる躓きの石に苦しんでいます。（中略）あなたの首位権を行使し，あなたの熱情を知らしめ，あなたの司祭職を履行すべき時です。あなたがお占めになっていらっしゃる〔教皇〕座の義務を果たし，揺らいでいる人々の心の信仰をあなたの見解をもって確固たるものとし，信仰を損なう者たちをあなたの権威の重みで踏みつぶしてください」と強く求め，「我々の神学者〔アベラルドゥス〕は（中略）三位一体のうちに段階を，神の威厳のうちに様態を，永遠のうちに数を設けようとしています。彼は「父なる神は絶対的な力だが，子〔なる神であるキリスト〕は特定的な力であり，聖霊は力ではない，また子が父に対する関係は，特定的な力が絶対的な力に対する関係〔と同じように劣って〕おり，種が類に対するようであり，人間が生物に対するようであり，青銅の印章がその原料である金属に対するようである」と説いています。〔異端者〕アリウス以上のところまで彼は行っていないでしょうか。このようなことを誰が聞いていられ

6）Cf. “Medieval Theories of the Syllogism,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*（https://plato.stanford.edu/entries/medieval-syllogism/#4, 2019 年 1 月 6 日閲覧）。

るでしょうか。このような瀆神に耳を塞がないでいられるでしょうか」[7]と，「父なる神と被造物である子イエスはその性質を異とする」と主張するアリウス以上の異端者であるとアベラルドゥスを断罪している。これは神に至る道についての彼ら二人の理解が大きく異なっていたゆえであり，両者の間には無理解と誤解の壁が厚く存在していたが，1141 年ローマ教皇は正式にアベラルドゥスを断罪した。

この弾劾されて寄る辺のない老人アベラルドゥスをペトルスは受け入れ，アベラルドゥスがベルナルドゥスと和解できるよう努めた。そしてインノケンティウス 2 世に書簡（97）を送り，「もしカトリック教会の耳に障るようなことを彼〔アベラルドゥス〕が書き，あるいは発言したのであれば，（中略）彼の発言から除き，著作から削除するようにさせました。このことはなされました。そして彼は〔ベルナルドゥスの許に〕行き，帰ってきました。そして帰ってきた彼は，〔ペトルスが助力を求めた〕シトー修道院長の仲介によって，クレルヴォー修道院長との以前の争いを収め，平和的に和解したと報告しました。（中略）彼は学校と研究の喧騒を捨て，あなたのクリュニーを終（つい）の住居に選びました。これは彼の老齢と病と信仰にふさわしいと考え，またあなたもよくご存じの彼の学知が私たちの兄弟たちの多くに有益であると信じ，彼の意向に私たちは同意し，彼が私たち（私たちは，あなたも知っていらっしゃるように，まったくあなたのものです）のところに留まることを私たちは好意と喜びをもって許しました。しかし，これは憐れみ深いあなたの御心にかなわなければなりません。それゆえ，まったくあなたのものである私は乞い願います。あなたにもっとも献身的であるクリュニー修道院が乞い願います。（中略）彼の人生と老齢の残された日々を，おそらく多くはないでしょうが，あなたのクリュニーで過ごすことをお命じくださいますように。そしてこの修道院から，雀

7）Cf. *Traité de Saint Bernard contre quelques erreurs d'Abélard, letter 190 au pape Innocent II*（https://www.pierre-abelard.com/text-bernard-capitula.htm#B）_1, 2019 年 1 月 6 日閲覧）。

のように（中略），誰かの訴えによって追放されたり除かれたりすることがないようにして下さり，あなたがつねにあらゆる良きものを称えていらっしゃるように，またこの者を慈しんで，使徒の守りの盾によって保護してくださいますようお願い申し上げます」[8] と懇願し，許しを得ている。

そしてアベラルドゥスの死を告げる書簡（115）においては，傷心のかつての恋人エロイーズ[9] の徳を称え，「あなた〔にお会いすること〕については，すべてを計らう神の摂理によって私にはできませんが，あなたのものであるあの方については許されています。しばしば〔語られ〕つねに名誉をもって語られる，キリストの僕であり真に哲学者であるペトルス〔アベラルドゥス〕師です。神の同じ計らいは，その生涯の最後の年月を過ごさせるべく，彼をクリュニー修道院に移されました。そして彼は神の計らいを，自らのうちに，そして自らによって，金や純金に優る捧げものによって豊かにされました。私たちのあいだでの彼の徳あり謙遜で敬虔な生活について，クリュニー修道院はどのような証言も致しますが，わずかな言葉では説明できません」[10] と，アベラルドゥスを修道女であるエロイーズの「あなたのもの」（！）と呼び，修道院におけるアベラルドゥスの謙遜のさまを報告している。そしてアベラルドゥスが療養のため他の修道院に移ったのちも，「そこで身体の状態が許す限りにおいて，以前の研究を再開し，つねに本を読みふけり，大グレゴリウスの著作に読むことができるように，一瞬も無為に過ごすことを許さず，つねに祈るか，読書するか，著述するか，口述をしていました。（中略）そして死すべき者たちが共通に負うべきもの〔死〕を支払うべく，彼は病魔に侵され，重篤になり，まもなく最期を迎えようとしていました。そのとき彼は告白をしましたが，

8）Giles Constable, *Letters of Peter the Venerable*, vol. 1, Harvard University Press, 1967, pp. 258–259.

9）アベラルドゥスとエロイーズについては，マリアテレーザ・フマガッリ＝ベオニオ＝ブロッキエーリ『エロイーズとアベラール』（法政大学出版局，2004 年）を参照。

10）Giles Constable, op.cit., p. 306.

本当になんと徳あり，なんと敬虔で，なんと正統信仰にかなうものだったことでしょう。彼はまず信仰について告白し，それから罪について告白しました。それから彼の心の喘ぐような望みによって，〔天への〕旅の糧食であり，永遠の生の保証である贖い主の身体〔である聖体〕を拝領しました。どれほどの信仰をもって，彼が自らの身体と魂を，現世において，また永遠に，主に委ねられたか，（中略）その修道院のすべての修道士が証人となっています。このようにペトルス〔アベラルドゥス〕師はその人生を終えられました。彼は卓越した学知でほぼすべての地で知られ，あらゆる地で有名でしたが，「私は柔和で謙遜な者だから，私から学びなさい（マタイ 11：29）」とおっしゃった方〔であるイエス〕の弟子として，柔和で謙遜であり，主の御許へと，そう信じられるべきように，このようにして去って行かれました。それゆえ，主におけるもっとも親愛で尊ぶべき姉妹〔エロイーズ〕よ，肉の絆ののち，より強くより価値ある神の愛の絆によって結びついた彼〔アベラルドゥス〕を（彼と一緒に，彼の導きによって，あなたは主に長く仕えてこられましたが），あなたに代わって，あるいはもう一人のあなたとして，私は言いましょう，主はその抱擁のうちに〔彼を〕慈しまれ，そして主が再臨されるとき，大天使の合唱のなかで，天より下られる神のラッパの轟きのうちに，神の恩寵を通じて，主は〔彼を〕保って，あなたに返してくださるでしょう。それゆえ主のうちに彼を想いおこしてください」[11] と，ペトルスはその豊かな文才と修辞を駆使して，「異端者」と指弾されたアベラルドゥスを「キリストの弟子」と呼び，エロイーズに慰めの書簡を書き送っているのである。

このような優しい心遣いで知られるペトルスは，実際，他の同時代の人々からも「穏やかで，知的で，開かれている」と称えられたが[12]，彼の

11）Ibid., pp. 307–308.

12）Cf. Denyse Riche, *L'ordre de Cluny à la fin du Moyen Age*, Presse de l'Université Saint-Etienne, 2000, p. 38.

時代に偉大なクリュニー修道院の繁栄には翳りが見え始めていた[13]。さまざまな理由が求められようが，その原因は，結局，あまりに急激な規模拡大にあったといえるだろう。第 5 代院長オディロ（在任 994–1049）や第 6 代院長ユーグ 1 世（在任 1049–1109）の時代に，控えめに数えてもクリュニーの傘下修道院の数は 800 以上に増えたとされる。だが，それにともなって修道会運営に関わるガバナンスの問題が多発し，司教権を蔑ろにしたため周辺の司教たちの不満が噴出した。さらに壮麗な第 3 クリュニー修道院建設や贅沢な生活のために，所領からの収入では賄い切れず，レオン・カスティリャ王アルフォンソ 6 世（1040 頃 –1109）による金貨 1 万タラントに代表されるような貨幣による寄進や借財に大きく依存し，これらの貴金属の流入は地域のインフレを招き，修道院財政をいっそう悪化させていた。これらの困難に直面してユーグ 1 世の跡を襲った第 7 代院長ポンティウス（在任 1109–1122）は修道院共同体の内部分裂を招き，ローマの牢獄で最期を迎えていた。それと同時にシトー会に代表される新しい修道生活の理想が唱えられ，修道制の理想に立ち返り厳格で清貧な生活を送るよう求められていたのである。

そのような中でペトルスは叔父である第 8 代クリュニー院長ユーグ 2 世の後を継いで 1122 年 30 歳でクリュニーの第 9 代院長に就任した。母はクリュニー修道院第 6 代院長ユーグ 1 世の姪であり，少年期にユーグ 1 世の要望で修道士として奉献され，1109 年に修道誓願を立てたという，まさにクリュニー修道院の本流に立つ人物であった。

ペトルスは自らの信じる理想を実現しようとし，緩んだ規律の立て直しを企図し，贅沢を諫め，冗費を削った。求めに応じて，あるいは必要に促されて，彼はローマや王や皇帝，あるいは各地の教会会議や傘下修道院を訪れ，問題解決に努力し，クリュニーの立場を擁護した。そのためにも多くの書簡を有力者たちと交わし，『奇跡について *De Miraculis*』をはじめとする作品を著した。そして教会の当時の三大脅威，すなわち異端者，ユ

13）関口武彦『クリュニー修道制の研究』（南窓社，2005 年）参照。

ダヤ人，イスラーム教徒を論破するため，3 つの論争書を残している。異端者ローザンヌのヘンリクス（1148 頃没）および彼の先行者であるブリュイのペトルス（生没年不明）を論駁する『ブリュイのペトルス派駁論 *Contra Petrobrusianos*』，『サラセン人の異端大要 *Summa totius heresis Saracenorum*』および『サラセン人の分派あるいは異端論駁 *Liber contra sectam sive heresim Saracenorum*』，『ユダヤ人たちの長き頑迷に対する論駁 *Liber adversus Iudaeorum inveteratam duritiem*』（以下『ユダヤ人駁論』）である。これらの論争書においては，だが彼がアベラルドゥスに示したような優しさはまったく見られない。特にユダヤ人に対する攻撃は厳しさを極めているが，まず『ユダヤ人駁論』以外の作品から検討しよう。

2. 反ユダヤ的伝記：『奇跡について』の「アルバーノのマテウス伝」

『奇跡について』はペトルスが 1127 年頃から構想し，死の年まで手を入れ続けた著作で，当時の修道士の内面が垣間見られると評価される[14)]。同時に，一見すると単なる聖人伝あるいは奇跡譚のように見えるが，修道院の権益を侵す俗人領主を脅し，迷信に惑わされる農民に警告を発し，規律を守らぬ修道士に厳罰を示した作品である[15)]。ここにユダヤ人は何回か描かれているが，もっとも印象的なのはクリュニー修道院出身でサン・マルタン・デ・シャン支院の院長を経て，アルバーノ枢機卿司教に叙せられたマテウス（1085 頃 –1135）に関わるものである。第 2 巻第 15 章においてペトルスは以下のように記している。

> 彼の誠実さと信仰を称えるために，私はダヴィデとユダヤ人の王国について〔第 14 章で〕語りましたが，このことを説明するために，

14）Cf. Jean-Pierre Torrell, Denise Bouthillier, *Pierre le Vénérable, Abbé de Cluny : le courage de la mesure*, Cerf, 1988, pp. 119–132.

15）杉崎泰一郎『12 世紀の修道院と社会（改訂版）』（原書房，2005 年），特に 25–125 頁を参照。

私が思い出したある話を語らなければなりません。これは，実際，ユダヤ人自身が問題とされている事例においてその正しさが証明されています。

〔そのとき〕マテウスは，すでに述べたように，サン・マルタン・デ・シャン支院の院長を少し前から務めていましたが，他の問題とともに，兄弟たちはマテウスに修道院の借財の問題を報告しました。マテウスが債権者を調べると，その一部がユダヤ人であることが分かりました。すぐ彼はこのことを報告した兄弟たちに向かって，「どうして，あなたたちはキリスト教徒であり修道士でありながら，ユダヤ人で不信仰の輩である彼らから金を借りることを受け入れたのですか。実際，キリストと〔悪魔〕ベリアルの間に何らの一致がありうるでしょうか。光と闇の間に，主を信じる者と信じない者の間に，何らの交わりがあるでしょうか。行きなさい，行きなさい。できるだけ速やかにこの非難すべきつきあいの絆を断ち切って，この借財を返済しなさい。そして，これからは決して与えたり，受け取ったり，借りたり，預けたりするという口実で，どんな取引であれ，ユダヤ人と関係を持たぬよう気をつけなさい」とおっしゃりました。

これに対して兄弟たちが「修道院が貧しいので，ユダヤ人から借金することはやめられません」と答えると，彼は彼らにおっしゃいました。「神の御心にかないますように。二度と，そのようなことをあなたたちは言ってはいけません。どのような顔をして，実際，どのような心をもって，救い主であるキリストの祭壇に私は近づくことができましょうか。主の優しき御母にお話しようとするときに，どのように振る舞えばいいのでしょうか，あの御方たちを冒瀆する敵たちにお世辞を言っているというのに。どのようにあの御方たちの心にかなうことができましょうか，あの御方たちの最悪の敵たちの友となってしまったならば。どのようにあの御方たちの加護を大胆にも求め祈ることができましょうか，同じ口であの御方たちの敵に，金銭のために，あ

るいは他の理由という口実で，追従したならば。このことは単に借金の問題ではなく，来世に関わるものであることに注意しなさい。彼らに借りたものをすべてすぐに支払いなさい。そしてこれからは，つねに守るよう定められた法によるように，彼らとの取引をすべてやめなさい」とおっしゃいました。このようにして，この敬虔な御方は，信仰の熱情に満たされて，これらの契約を禁じ，彼の心のもっとも親愛なる御方，主であるキリストに捧げる愛を示されたのです[16]。

ここでマテウスは「ベリアル」「冒瀆する敵」など激しい否定の言葉をきわめて執拗に重ねている。ある面ではステレオタイプ的な表現と言えるが，この反ユダヤ人的発言は，マテウスからペトルスが何らかのかたちで聞き知った事実に基づくものの，同時にペトルス自身の思いであったろうと考えられている。当時，利潤を追求する貨幣経済が浸透しつつあり，それにともなうストレスがユダヤ人に投影されて，反ユダヤ的感情を激化させていたとされるが[17]，実際にクリュニー修道院は，キリスト教徒の金貸し以外にも，ユダヤ人金貸しに頼らざるをえなくなっていたようだ。修道院の聖具室にあったキリスト磔刑像の純金製の衣装（金 500 オンス）を担保にマコンのユダヤ人から多額の借金をしたという記録が残されている[18]。

またイングランドのウインチェスター司教ヘンリ[19]宛書簡（56）において，ペトルスは「あなたの富が成し遂げた崇高な偉業を私は称えないでい

16）Pierre le Vénérable, *Les Merveilles de Dieu*, Jean-Pierre Torrell, Denise Bouthillier (traduction), Cerf, 1992, pp. 228–230.

17）Cf. Lester K. Little, *Religious Poverty and the Profit Economy in Medieval Europe*, Cornell University Press, 1983.

18）関口武彦，前掲書，427 頁参照。

19）Cf. Edmund King, “Blois, Henry,” *Oxford Dictionary of National Biography Online*.（http://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-12968?rskey=2UQTRf&result=1，2019 年 1 月 6 日閲覧）。

られましょうか，〔ユダヤ人という〕バビロン人たちに奪われた主の家の器を，〔アケメネス朝ペルシアの〕キュロスのような王の寛大さによって，〔旧約の預言者〕エズラのような祭司の配慮によって（エズラ記（ギリシア語）1：7–8），あなたは〔クリュニー修道院という〕神殿へと取り戻してくださったのです。そして私たちの時代のユダヤ人たちによって再び十字架に架けられなければならず，その服を剥がれたキリストに，あなたはふたたび同じ服を着せてくださったのです」[20] と謝意を表しているが，これはユダヤ人への借金の担保に入っていた聖具が，莫大な富を有するヘンリの資金[21] によって取り戻せたことを指すと言われている[22]。このようにペトルスは経済的にユダヤ人に頼らざるを得ず，そして苦しんでいたのである。

3. 十字軍のための財産没収の勧め：「フランス王ルイ 7 世宛書簡」

このような感情は，ペトルスがフランス王ルイ 7 世に 1146 年に送った書簡（130）において爆発している。

> 地上の王であるあなたとともに，御自らの十字架の敵に対して軍備を整えるよう永遠の王〔である主が〕命じられた軍隊に，巡礼者としてついていくことは私にはできませんが，私にできる限りの献身と祈りと助言と助力によって，お供することを私は熱望しています。驚くことではありません。キリスト教徒という名に値しない者であろうとも，万軍の主の軍隊のこれほど大きな驚くべき興奮によって動かされない者がいるでしょうか。それぞれのしかたで，魂を励まして，天の遠征を支える用意がない者がいるでしょうか。今やわれわれの時代に

20）Giles Constable, op.cit., pp. 177–178.

21）実際，ヘンリはクリュニー修道院に対して 1140 年代に「金 1000 オンス」の融資を行っている。関口武彦，前掲箇所参照。

22）Cf. Torrell, “Les Juifs dans l’œuvre de Pierre le Vénérable,” pp. 333–34.

おいて，古き世界は一新され，新しき恩寵の日々において，いにしえの民の奇跡が力を取り戻しました。かつてモーゼはエジプトを出て，アモリ人の王たちを〔自らに〕従う多くの民によって一掃しました。彼に続いてヨシュアは，カナーン人の王たちを無数の異教徒たちとともに神の命令によって平伏させ，神を信じぬ者らを滅ぼして，その地を籤によって神の民に分け与えました。世界の西の端，むしろ太陽が沈むところより出発して，キリスト教徒の王が東を目指し，不信仰のアラブやペルシアの異教徒や聖地を再び従わせようとして，キリストの十字架で武装して向かおうとしています。かのユダヤ人の指導者たちは確かに偉大で，その生涯の聖性において最近の指導者を上回っていますが，このキリスト教徒の王よりも優れてはおらず，おそらく劣っているように見えます。なぜなら〔ユダヤの指導者たちは〕神の命令によって，戦争で異教の民らを一掃し，彼らの土地を神と自分たちのものとしましたが，この〔現在の指導者である〕方〔である王〕は同じ神の頷きと命令によって，真の信仰の敵であるサラセン人たちを一掃し，彼らの土地を自らにではなく神に従わせようと労苦しようとしているからです。彼ら〔ユダヤ人の指導者たち〕は神の命令を実行し，地上の報酬を望んで，軍事に少しは労苦しました。一方，この方は神のために王国と富と自らの命を投げ出し，あるいはむしろ犠牲にされます。それは偉大な王が何か地上のものを地上で得ようとするのではなく，死すべき〔現世の〕王国の滅んだ後，王の王〔である主〕によって，名誉と栄光によって〔天上で〕戴冠されるためにです。それゆえ確かな高き栄光を王が失うことはないでしょう，王は地上の武器ではなく天上の武器を備えており，東方の野蛮人がどれほど多かろうとも，生きる神〔であるキリスト〕の軍隊に彼らは抵抗することはできないでしょう。誰が抗うことができるでしょうか，名誉と富と意志と家族と祖国を捨て，すべてを放棄して，自らがキリストに従い，キリストのために労苦し，キリストのために戦い，キリストのために

死に，キリストのために生きることを選んだ人々に対して。誰があの御方〔キリスト〕の軍隊に地上で立ちふさがることができるでしょうか，ご自身について「私は天と地における一切の権能を授かっている（マタイ 28：18）」とおっしゃっている御方に。子としての権能を人間たちのために受肉した「人」として神よりお受けになりましたが，〔キリストは〕この権能を，しかし，永遠から真の神としてお持ちだったのです。

しかしキリスト教徒の希望に立ちふさがる敵たちを遠く離れた地で追い詰め攻撃するのが何の役に立つでしょうか，邪悪で冒瀆的で，サラセン人よりもはるかに卑しいユダヤ人たちが，私たちから遠く離れたところではなく，私たちの間で，これほど自由で大胆に，キリストとキリスト教のすべての秘跡を，不潔にも冒瀆し，踏みつぶし，汚しているというのに。〔十字軍という〕神への熱情が神の子ら〔の資産〕を食い尽くしているというのに，キリストとキリスト教徒たちの最大の敵であるユダヤ人たちがこのように無傷のまま逃れられたとしたら，どうでしょうか。キリスト教徒たちの王の心に，あるユダヤ人たちの聖なる王がかつて言った「あなたを憎む者たちを，主よ，私は憎み，あなたの敵たちを厭うと言わなかったでしょうか。激しい憎しみをもって私は彼らを憎みます（詩篇 139：21–22 参照）」という感情が生まれないのでしょうか。サラセン人たちが憎むべき者であるのは，彼らが「キリストは処女から生まれた」と私たちと同じように認め，キリストについて多くのことを私たちと同じように考えているにもかかわらず，これはもっとも大きな点ですが，彼らが神の子〔イエス・キリスト〕が神であることを否定し，私たちの救いのすべてがそこにあるキリストの死と復活を否定するからです。だが，〔そうであるならば〕ユダヤ人たちはどれほどいっそう忌むべきで憎まれなければならないでしょうか。彼らはキリストとキリスト教信仰についてまったく何も認めず，キリストが処女から生まれ，キリストが人となっ

て人間の罪を贖われたすべての秘跡を否定し，冒瀆し，嘲笑するのです。

この問題について，このように私が言ったとしても，それは王の剣，あるいはキリスト教徒の剣というべきでしょうか，それをこれらの不信仰の輩の殺戮のために研がせようというのではありません。なぜなら，不信仰の輩について神の詩篇で書かれていることを私は想いおこすからです。神の霊を受けて預言者は「神は私に私の敵について示された。彼らを殺してしまわないでください（詩篇 59：12 参照）」とおっしゃるのです。神は〔ユダヤ人たちが〕すべて殺され，まったく絶えるのを望んでいらっしゃりません。より大きな苦しみと恥辱のために，兄弟殺しのカインのように，死よりも悪い生を保つよう望まれているのです。なぜなら，カインは兄弟の血が流されたのち，神に「私に出会う者はだれであれ，私を殺すでしょう」（創世記 4：14）と言いましたが，神は彼に「死によって死すと考えてはいけない，おまえは呻きながら追放され「その口を開けて，お前の兄弟の血をお前の手から飲み込んだ地を流離（さすら）うだろう（創世記 4：11）」」とおっしゃったのです。このように断罪されるべきユダヤ人たちは断罪され，キリストの受難と死のときから，神のこの上なく正しい峻厳さは果たされ，この世界の終わりまでこれはなされることでしょう。キリストの血を，自らの兄弟の肉のように，斥ける者らは，奴隷となって，惨めに，おどおどと呻きながら追放されて地を流離うのです。それは，預言者によれば，惨めな民の残りが，異教徒たちのすべてが呼ばれ，神の御許へと帰る（イザヤ 10：11 参照）ときまでです。そしてこのようにして使徒によれば「全イスラエルが救われる（ローマの信徒への手紙 11：26）」のです。ユダヤ人は殺されるべきだと私が促して言っているのではありません。その邪悪さにふさわしい仕方で罰せられるよう私は勧めているのです。

では，これらの不信仰の輩を罰するために何かこれから述べること

以上にふさわしい仕方があるでしょうか，それによって不正が断罪され，慈愛が鼓舞される方法以上に。欺瞞によって儲けられたものを彼らが失って，不正に盗まれたものが，（これが一番悪いことですが）これまで大胆で罰せられることのなかった盗人から取り上げられること以上に正当なことはあるでしょうか。私が申しあげたことはみんなが知っています。〔ユダヤ人たちは〕畑を単に耕すことによってではなく，正当な軍務によってでもなく，あるいは何か誠実で有益な職務によって，その納屋を穀物で，蔵をブドウ酒で，財布を貨幣で，銭箱を金銀で富ませたわけではありません。私が言ったように，キリストを崇める者たちから苦痛をともなってくすね，盗人のように盗みによって買い，価値あるものを安い価格で彼らは購入したのです。もし盗人が夜にキリストの教会に押し入り，敢えて瀆聖を犯して燭台や水差しや香炉や，さらに聖なる十字架や聖別された杯さえも運び去り，キリスト教徒たちを避け，ユダヤ人の許に逃げ込んだならば，〔盗人は〕隠れ家に助けられるだけでなく，彼ら〔ユダヤ人〕のところで，断罪されるべき安全に護られて，聖なる教会堂から盗んだものをサタンのシナゴーグに売却するのです。〔盗人は聖具という〕キリストの体と血の器を売り飛ばし，〔聖具という〕キリストの体は〔ユダヤ人たちによって再び〕殺され，血は流されます。かつて彼ら〔ユダヤ人〕は死すべき者たちの間で暮らしていたこの御方〔キリスト〕を，この上ない頑なさと不正によって傷つけましたが，今度は永遠の神としての威厳をもって〔聖具のうちに〕座しておられるこの御方を，大胆にも，瀆神の言葉によって苦しめるのをやめないのです。これらの聖なる器は，私が前に言ったように，かつてカルデア人たちのものであったように，現在は彼らのものとして占有されていますが，たとえ気づかれなくとも，不正を免れていません。〔キリスト〕ご自身に捧げられたと彼ら〔ユダヤ人が〕考えていない器のうちで，今なお続くユダヤ人の侮辱にキリストは十分苦しんでおられます。嘘を言わない

人たちからしばしば私が聴いたところでは，これらの天の器を，キリストご自身と私たちの恥辱になるようにと，考えるも身の毛がよだち，言うも汚らわしい悪しきものに彼らはいつも変えているというのです。その上，このように瀆神の盗人とユダヤ人たちの商売が守られるよう，古くまったく悪魔的な法がキリスト教徒の君主たちによって公布されており，もし教会の財産が，あるいはもっと悪い場合には，聖なる器がユダヤ人たちの許で発見されたとしても，瀆神の盗みによって所有されたものを返すようにとも，盗人の名を白状するようにとも，ユダヤ人は強いられないのです。ユダヤ人には唾棄すべき瀆神という大罪が残りますが，この罪は，もしキリスト教徒ならば，絞首刑という恐ろしい死によって罰せられます。ユダヤ人が肥え太り喜びに満ちる一方で，その罠によってキリスト教徒は吊るされるのです。それゆえ，ユダヤ人の富のうち悪によって得られた豊かさは取り上げられ，あるいは大部分が減らされなければなりません。そしてキリスト教徒の軍隊はサラセン人たちを滅ぼすため，自らの主であるキリストへの愛のため，自分の金銭や土地を惜しんでいませんが，このように邪に得られたユダヤ人たちの財産も惜しんではいけません。彼ら〔ユダヤ人〕の生命は守られますが，金銭は没収され，瀆神のユダヤ人たちの金銭に助けられたキリスト教徒の武器によって，不信仰のサラセン人たちの大胆さは一掃されるでしょう。ユダヤ人たちの財産はキリストの民の役に立ち，道を外れた彼らの役にも立つでしょう。かつて彼らの父祖たちが神の心にかなっていたとき，神の命令によってエジプト人たちから引き渡された財産が，彼らが神に仕えるために役に立ったようにです（出エジプト 12：35 参照）。慈愛溢れる王よ，以上のことを，キリストへの愛によって，そしてあなたとキリストの軍隊への愛によって，私は書きました。もし聖なる遠征のために，ふさわしい仕方でキリスト教徒たちの財産が費やされる一方で，不信仰の輩たちの金銭がそれ以上に用いられなかったならば，神が不愉快に思われるだろう

としても，馬鹿げたことではないと私は考えるからです[23]。

ペトルスはここでも激しい否定の言葉を重ね，ユダヤ人は「邪悪で冒瀆的で，サラセン人よりもはるかに卑し」く，内なる敵であると断じている。そしてユダヤ人の殺戮を求めてはいないが，書簡（56）から垣間見られるようなユダヤ人の商行為，特に貸し付けに対する感情的な否定が爆発し，彼らの財産は「畑を単に耕すことからではなく，正当な軍務からでもなく，あるいは何か誠実で有益な職務」から得られたのではなく，「欺瞞によって儲けられたもの」で，「キリストを崇める者たちから苦痛をともなってくすね，盗人のように盗みによって買い，価値あるものを安い価格で彼らは購入した」ものであるから，彼らの財産を没収して十字軍に用いるべきであり，そうすれば「ユダヤ人たちの財産はキリストの民の役に立ち，道を外れた彼らの役にも立つ」と主張するのである。

一方で，このペトルスの書簡が，ルドルフという名のシトー会士によって煽動された 1147 年のライン地方におけるユダヤ人虐殺の企てに影響を与えたと主張する研究も示されている[24]。ペトルスの発言がどのように受けとめられたかは明らかではないが，ルドルフによる虐殺を止めたのは，好戦的と見なされがちなクレルヴォーのベルナルドゥスであった。彼は興奮する民に回状を送り，「あなたたちが神への情熱に燃えていることは分かっており，それを私は喜んでもいますが，知恵による節度が絶対欠けてはいけません。ユダヤ人たちを決して迫害してはいけません。彼らを殺したり，追放したりしてもいけません。聖書を知っている者たちは問いなさい。ユダヤ人について詩篇のなかでどのように預言されているか自らに問いなさい。「神は私の敵について，彼らを殺さないように示されました。それは私の民が忘れることがないようにです（詩篇 59：12）」と教会は言

23）Giles Constable, op.cit., pp. 327–330.

24）Cf. Torrell, “Les Juifs dans l’œuvre de Pierre le Vénérable,” pp. 341–342.

っています。ユダヤ人は私たちにとって「生きる文字」であり，私たちにつねに主の受難を想いおこさせてくれるのです。そのためにこそ彼らはあらゆる国々に離散させられ，このような罪にふさわしい罰を受けながら，私たちの罪が贖われたことの証人となったのです。それゆえ教会は同じ詩篇において続けて「あなたの力で彼らを散らし，彼らを覆してください，われらの守り手である主よ」と言っているのです。このようにして彼らは離散させられました。彼らは覆され，彼らはキリスト教徒の王たちの下で過酷な捕囚の日々を送っています。しかし「夕べになれば，彼らは戻ってくるでしょう（詩篇 59：15）」。そのとき彼らは再び考慮に入れられるのです。そして「異邦人全体が入るとき，全イスラエルも救われるであろう」（ローマの信徒への手紙 11：25–26）と使徒もおっしゃっています」とベルナルドゥスは説いた[25]。同じ権威に寄りながらも，むしろベルナルドゥスはアウグスティヌス（354–430）以来の教会の伝統を守って，ユダヤ人を「救済の証人」，あるいは「旧約聖書の預言の保存者」として保護しようとしたのである。

4.「理性的」な暴論：『ユダヤ人駁論』

前述の 2 作品と異なり，反ユダヤ的主張をさまざまに展開する『ユダヤ人駁論』はいくつかの段階を踏んで著述され，完成は 1147 年頃と考えられている[26]。ペトルスの論争書のうちでもっとも規模が大きく，全体は 5 つの書からなり，第 1 章「キリストは神の子である」，第 2 章「キリストはどのように神であるか」，第 3 章「キリストは地上の王ではなく，永遠なる天の王である」，第 4 章「キリストはすでに来られ救済の時を定め

25）Cf. Joël Regnard, “Le sens de la permanence du people juif pour saint Bernard,” *Collectanea Cisterciensia* 67 (2005), pp. 102–111.

26）Cf. Peter the Venerable, *Against the Inveterate Obstinacy of the Jews*, translated by Irven M. Resnick. The Catholic University of America Press, 2013, pp. 30–31

られた」，第 5 章「ユダヤ人たちの愚かしいつくり話について」で構成されている。

一読して印象的なのは，「フランス王ルイ 7 世宛書簡」同様に，その表現の激しさである。「瀆神者」「神の敵」などだけでなく，ユダヤ人を「人間以下」と見なす議論が多い。12 世紀になってユダヤ人に対する新しい論駁方法が生まれ，理性によってユダヤ人に誤りを認めさせ，キリスト教信仰を擁護しようとしたとされるが[27]，ペトルスは「ユダヤ人は頑迷で，理性によれば明らかなことを受け入れようとはせず，それゆえ理性のない「動物」だ」とし，ロバ，羊，牛などの家畜にしばしば譬えているのである[28]。

たとえば，『ユダヤ人駁論』第 5 章の冒頭において「ユダヤ人よ，私は多くの根拠となるテキストと議論によって，提示された問題に関わる諸点について，あらゆる人間を納得させてきたように見える。しかし，もし私があらゆる人間を納得させたとしたならば，私はおまえも納得させたにちがいない。だが，それはおまえが人間であるとしたならばである。実際，私はおまえが人間であることを敢えて認めることはしない。それは私が嘘をつかないようにするためである。なぜなら人間と他の生き物や野生動物を隔て，動物に対する優越を与える理性という能力がおまえにはない，あるいは埋没していると私は考えるからである。おまえたちの詩篇は「人間は野生の獣のようにされた」と嘆いているが，これはこれらのことの証拠を私に与えてくれている。「人は栄華のうちにあるとき，それを理解しなかった。彼は理性のない獣に比せられ，獣のようにされたのである（詩篇 49：21）」と言っているではないか。ある理解によれば，これはすべての人間，すなわち人類について言われているとされるが，しかし，お前たち

27）Cf. Peter the Venerable, *Against the Inveterate Obstinacy of the Jews*, p. 25.

28）Cf. Torrell, “Les Juifs dans l’œuvre de Pierre le Vénérable,” pp. 337–338.

はこれが種としてのおまえたち〔ユダヤ人〕，個人としてのおまえたち〔ユダヤ人〕について言われていることを否定できないだろう，おまえたちには理性がまったく衰えているのであるから。では，なぜおまえたちは野生動物と呼ばれてはいけないのか，獣と呼ばれてはいけないのか，駄獣と呼ばれてはいけないのか。牛を，あるいはもしおまえがよければ，ロバ（これ以上に愚かな家畜はいないからだが）を考えてみよ。そしてこれらの動物が聞くことができるものすべてを聞いてみよ。おまえたちが聞くものとロバが聞くものと，何の違いがあろうか。何の区別があろうか。ロバは聞くが，理解しない。ユダヤ人も聞くが，理解しないのだから」[29] と，ある種の三段論法を用いながら，勝ち誇ったようにユダヤ人には理性がないと罵っているのである [30]。

さらにその一方で，ペトルスは『ユダヤ人駁論』においてタルムードについて言及している。タルムードとは，前 2 世紀から 5 世紀までのユダヤ教ラビたちがおもにモーセの律法について行なった口伝，解説を集成したもので，ユダヤ教において，いわゆる旧約聖書に次ぐ権威を有するが，彼がどのような経路で知ったのかは明らかではないものの，ペトルスはタルムードに言及したもっとも早い西欧人の一人とされる [31]。イスラーム教を論駁すべくクルアーンを翻訳させたように，ペトルスは用意周到に相手の主張を理解したうえで，反論したようだ。だが彼の手法は基本的に聖書以外の権威によることを否定したため [32]，聖書正典成立以降の発展をまとめたタルムードは，『ユダヤ人駁論』第 5 章が示すように，「ユダヤ人たちの愚かしいつくり話」になってしまうのである。

ペトルスは，前述のように，この『ユダヤ人駁論』とともに『ブリュイ

29）Peter the Venerable, *Against the Inveterate Obstinacy of the Jews*, p. 211.

30）Cf. Torrell, “Les Juifs dans l’œuvre de Pierre le Vénérable,” p. 337.

31）Cf. Torrell, “Les Juifs dans l’œuvre de Pierre le Vénérable,” p. 335.

32）Cf. Peter the Venerable, *Against the Inveterate Obstinacy of the Jews*, p. 28.

のペトルス派駁論』，『サラセン人の異端大要』および『サラセン人の分派あるいは異端論駁』の論争書を著した。幼児洗礼，死者の代禱，教会堂の建立，十字架の崇拝などを聖書の教えにもとづかない不必要なものとして否定した異端者ブリュイのペトルス（1131 没）は断罪された。死者の代禱はクリュニー繁栄の源泉であり，第 3 クリュニー以上に壮麗で巨大な教会堂は存在しなかったためであるかもしれない。イスラーム教徒についても，イエスが神であることを認めず，三位一体論を否定したとして退けた。クルアーンを翻訳させるなど理解しようとはしたが，彼らイスラーム教徒を異なる宗教を信仰する者とは認めず，ネストリウス派とユダヤ教によって感化された「キリスト教異端」と見なし，「彼らがどれほど汚れ，無価値かを知り，聖霊の炎に駆り立てられた神の僕が現れ，この異端に対して反駁を執筆するだろう」と期待し，その準備として翻訳させたのである。結局，彼の世界観を拒む者らは断罪された。社会とキリスト教が一体化して全体を秩序づけ，異端者やイスラーム教徒という異分子を排除し「浄化」するというクリュニー的世界観がこれらを支配していたのである[33)]。

5. 終わりに

ペトルスの反ユダヤ的主張は，どのように理解したらよいのだろうか。彼の議論をめぐっては評価が分かれ，それほど重く考えない研究者もいれば，反ユダヤ主義の淵源の一つと捉える研究者もいるようだ。現存する写本もそれほど多くはなく，影響は限定的だったともされる[34)]。

クルアーンを翻訳させ，タルムードに言及するなど用意周到であったペ

33）Cf. Dominique Iogna-Prat, *Ordonner et exclure : Cluny et la société chrétienne face à l'hérésie, au judaïsme et à l'islam : 1000–1150*, 2e éd. corr..Paris, 2000.

34）Cf. Torrell, "Les Juifs dans l'œuvre de Pierre le Vénérable," pp. 345–346.

トルスは，理性を重んじたがゆえに，アベラルドゥスの学知をクリュニー修道院に導入するために彼を保護したのであろう。単に老齢の彼に同情したのではあるまい。だがペトルスは，三段論法的な手法を用いながらも，アベラルドゥスの真価を本当には理解していなかったのだろう。

この時代にはユダヤ人との対話の形式をとった論考が多く現れているが[35]，ペトルスの『ユダヤ人駁論』は，一部においては対話者を想定しているものの，ほとんどがモノローグであり[36]，感情の激するままに，前述のような聞くに堪えない悪罵を連ねている。相手に対する敬意をもって真摯に対話しようとしていない。これはアベラルドゥスがクリュニー修道院に受け入れられて 1141 年から執筆した『哲学者（異教徒），ユダヤ人およびキリスト教徒の対話』（未完）とは対照的である。彼はユダヤ教とキリスト教の類似を強調し，ユダヤ人の苦難を彼らが選ばれた民であることの証拠と見なした。またユダヤ人に金貸しを強要したことにユダヤ人迫害の原因があると考え，イエスの磔刑はユダヤ人の知るところではないとしたとされるのだ[37]。

人間は偏見に踊らされ，感情に煽られているときも，同時に「理性的」たりうる。そして時代の変化に応じて，その正当化の根拠を新たに探し求めることもできる。たとえば呪術的な世界観に基づいていた魔女狩りが，近代医学成立前の正統医学であった「四体液病理説」が支配的になるにつれて，新しく解釈され直され，メランコリーによるとされたようにである[38]。「異質」な者に向かいあうには，「理性的」であるだけでは不十分であり，何かが必要だ。そして現在は，その「何か」が問われている時代なのだ。

35）Cf. Peter the Venerable, *Against the Inveterate Obstinacy of the Jews*, pp. 31–34.

36）Ibid., pp. 33–34.

37）ユーリウス・H・シェプス編，前掲書，226 頁参照。

38）黒川正剛『魔女とメランコリー』（新評論，2012 年）参照。